

The 13th IAGG Master Class on Ageing in Asia 体験記

松久 凌大

(日老医誌 2025 ; 62 : 442-443)

初めに、今回、学部生と言う身でありながらこのような機会に参加させていただきましたこと、日本老年医学会の先生方、事務局の皆様、衷心より深謝申し上げます。

私は秋田大学医学部医学科5年次学生で、昨年からは本学の高齢者医療先端研究センターにて研究をさせていただいております。センターでは、地域在住のご高齢者を対象に健康度チェックや様々な介入をしており、疫学的な測定から、介入によってそれらの指標がどう改善するか、ないしは維持されるか、といった介入研究に携わらせていただいております。他、高齢者施設2つでアルバイトをさせていただいており、地域包括ケアシステムの、特に地方部での実情を働く中で見てまいりました。このMaster Classには、他国ではどのように医療や介護が提供されているのか、安心して老い、生活していく社会のためには何ができるか、を学び、考えたく、参加させていただきました。

13回目となるこの企画は、アジア諸国の老年学・老年医学の若手臨床家・研究者らが集まり、学会の著名な先生方のご講演をお聞きしたり、自らの研究の発表を行ったりすることで、アジア全体の老年医療の質の向上と繋がりを作っていくものとして企画されております。今回のテーマはIntegrated Care:統合ケアであり、老年医療のなかでも特に私の関心のある領域でした。

3日間の日程で、11種類もの講義が用意され、割り当てられた小グループ毎にケースディスカッションやポスター発表をし、グループでの優秀演題選定、優秀演題の発表セッションなど、ケースディスカッションの発表など多くのことが開催され、終わるころには心地よい疲労感を感じました。

講義のこと、ディスカッションのこと、ポスター発表のことで分けて記述させていただきます。

講義では、老年医療のことを広範に扱った話題に関する講演が提供され、統合ケア、転倒とサルコペニア、認知的フレイル:認知症、うつ、せん妄、普遍的ヘルスケアとしての長期的ケア、減薬のアート、などのタイトルで、各分野のエキスパートでいらっしゃる先生方のご講演をお聞きしました。特に印象に残っている点をかいつまむと、減薬のアートにて、減薬するのは医者にとって非常に躊躇しがちなことだが、老年科医としては本領発揮すべきところだ、という観点から、その意思決定をサポートするためのフレームワークが提示されたことでした。日本に帰国してから日本老年医学会のホームページを参照してみると、『高齢者の安全な薬物療法ガイドライン2025』、という名前で改訂されたばかりの日本版減薬・処方時の注意のガイドライン・フレームワークが提供されていることを知り、マレーシアで得た知を早速日本版に翻訳して使えることにワクワクしつつ、臨床実習に励ませていただきました。

続いてディスカッションでは、自己紹介ののち、高齢女性の高熱など体調不良のケースで、どのように診断するか、といったところから、治療後の退院先をどうするか、と言ったことまでディスカッションしました。診断においては、日本ではまず耳にすることのない感染症が鑑別の上位に出てきたり、これまた日本とは異なるワクチン接種歴の確認が出てきたりと、熱帯地域ならではの観点が多く挙がりました。退院先に関しては、各国の医療福祉との連携状況の共有がなされ、「日本は医療先進国だけれど、どのように対処しているの?」と言ったことは非常に興味を持って尋ねられました。ケースでは、家



Prof. Tan の行きつけのお店での夜ご飯の帰り道



グループDのみんな

族は別居でカナダに住んでいる想定でしたが、「日本ではこのようなインフォーマルなケアが十分でない状態では、転院に転院を繰り返して時間稼ぎしてしまう現状もあるんだ」ということを共有すると、驚きをもって迎えられました。逆に、他国からの意見では、患者さんをカナダに移住させよう、と言ったことや、寺社仏閣のサポートを得よう、家族を帰国させよう、などの意見がポ

ンボンと出てきて、一人の人を最期まで支える仕組みや考え方の違いを色濃く感じました。

ポスター発表では、うつと認知症のスコアの関連、老年病棟看護師のフレイルスクリーニングに影響を与える因子、in vitro での抗てんかん薬がアルツハイマー病に与える影響など、基礎臨床の各方面から広範な発表が行われました。私は E-sports を題材にした研究の発表をさせていただきましたが、E-sports の定義とは？実施環境は？継続調査したらどのように健康度に影響を与えそう？など様々な質問をお寄せいただき、フロアでも研究の発展に有益な教示を多くいただくことができ、貴重な機会でした。私のさせていっている介入研究は環境要因が非常に重要なのですが、別の国の視点から見た意見は、研究成果を普及させていくうえでとても勉強になる刺激の多い経験となりました。

総じて、学びが多いことは申し上げるまでもなく、数多くの志を共にする情熱の多い同世代の先生方とご縁をいただいたことは、この Master Class に参加させていただけたことの一歩の価値であると感じました。「私の国でもそういった介入をしてみたい！」「共同研究したいね！」というご意見や、「日本の医療福祉制度について、もっと継続して教えて！」というお声もいただき、ここから紡がれるご縁の機会に接することができて、とてもありがたい経験をさせていただきました。日本からご参加の他の先生方とも、今後継続して会ってこうねと話もして、参加者全員の他己紹介をプログラム冊子に掲載し、会期中は手厚いサポートでもてなしてくれた Malaysia をあとにしました。

プログラムとは外れますが、私個人はこの企画の翌日、Universiti Malaya にて、大会長をされていた Tan Mau Pin 教授の下で実習をさせていただくこともでき、それも含めて、日本の良さ、持ち帰れるところを含めて多くの学びを得させていただきました。

今回の IAGG Master Class に参加させていただけたおかげで得られた多くのことを、今後自身の学部生時代の臨床実習、初期研修、以降の医師人生で生かしてまいります。

この度は誠にありがとうございました。